

発達障害のある学生に対するコーチングの効果

高橋 知音

発達障害のある大学生へのコーチングは、主に米国で盛んに行われており、実証的研究によってその効果についても検討されている。しかし、その主な対象は注意欠如多動症 (Attention Deficit Hyperactivity Disorder: ADHD) のある学生であり、ASDについては扱われていない(展望論文としてはAhmann, Tuttle, Saviet, & Wright, 2018)。その理由の一つとして、米国の高等教育機関における障害学生の中でも、ADHD は最も人数の多い障害種の一つであるということがあげられる。

一方、秋元氏の論文でも指摘されている通り、我が国においては、発達障害のある大学生の中でも、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder: ASD) のある大学生が最も多く、発達障害のある学生のおよそ3分の2を占めている。こうしたことから、ASD のある大学生への支援技法の検討は重要なテーマであり、ASD のある大学生にコーチングの技法を適用した秋元氏の試みは、2019年の実践報告(秋元, 2019)に続く貴重な報告であると言える。

秋元(2019)では、コーチングセッションにおける主たるテーマが、時間管理、整理整頓、生活習慣など、ADHD のある学生が大学生活において直面する課題と同様のものが多かった。それに対し、本論文ではコミュニケーションをテーマにしたセッションが多く、ASD のある大学生が直面しがちな課題を扱っている。それでも設定したワークを高い割合で遂行しており、ASD のある大学生へのコーチングの適用可能性をさらに広げる内容となっている。

ただし、この結果のみから、コーチングがASD のある学生に対して常に有効な技法であるということまで一般化することはできない。今回対象となった学生においては、スキルトレーニングのプログラムに参加して社会的な行動についても練習済みであったこと、本人にスキルを使えるようになりたいという意欲があったこと、取り組む内容が明確であった

り見通しが持てたりすればスムーズに取り組む力があったことなどが、コーチングがうまくいったことに関係していると考えられる。このように、コーチングが有効となるASD のある大学生の特徴を検討していくことは、発達障害学生支援におけるコーチングの適用について考えていく上で、今後さらに実践例の蓄積が求められる。

また、コーチングを併用することで、社会的スキル訓練によって修得されたスキルの効果的使用の促進につながるとしたら、本実践の成果はASD のある人への支援において、非常に重要な示唆を与えるものとなる。最近のレビュー論文においても、ASD のある人においては、社会的スキル訓練を行っても、現実場面での適用に難しさがあることが報告されている(Gates, Kang, & Lerner, 2017)。本論文で示された成果は、コーチングがこの課題を克服するために効果的な技法になり得ることを示唆している。スキル訓練との併用についても、さらなる検討を期待したい。

【文献】

- 秋元孝城(2019):自閉スペクトラム症の学生に対する「コーチング」の実践. 明星大学発達支援研究センター紀要 MISSION,(4),45-60.
- Gates, J. A., Kang, E., & Lerner, M. D. (2017). Efficacy of group social skills interventions for youth with autism spectrum disorder: A systematic review and meta-analysis. *Clinical Psychology Review*, 52, 164-181.
- Ahmann, E., Tuttle, L. J., Saviet, M., & Wright, S. D. (2018). A Descriptive Review of ADHD Coaching Research: Implications for College Students. *Journal of Postsecondary Education and Disability*, 31, 17-39.